

正岡子規著「墨汁一滴」岩波文庫、岩波書店 1927年12月15日刊を読む

墨汁一滴

1. 病める枕^{まくら}辺に巻紙^{まきし}状^{じょう}袋^{ぶくろ}など入れたる箱あり、その上に寒暖計^{わんぬんけい}を置けり。その寒暖計^{わんぬんけい}に小^わき輪飾^{りんし}をくくりつけたるは病中^{びやうちゆう}いささか新年^{しんねん}をことほぐの心ながら齒^は朶^だの枝^{えだ}の左右^{さゆう}にひろごりたるさまもいとめでたし。その下に橙^{だいだい}を置き橙^{だいだい}に並びてそれと同じ大^おきさほどの地球儀^{ちきうぎ}を据^すゑたり。この地球儀^{ちきうぎ}は二十世紀^{じゅうにせいき}の年玉^{ねんぎよく}なりとて鼠骨^{ねずこつ}の贈^{くわ}りくれたるなり。直径^{ちゆうけい}三寸^{さんすん}の地球^{ちきう}をつくづくと見てあればいささかながら日本の国^{くに}も特別^{とくべつ}に赤^{あか}くそめられてあり。台湾^{たいわん}の下^{した}には新日本^{しんにっぽん}と記^ししたり。朝鮮^{ちやうせん}満州^{まんしゆう}吉林^{きつりん}黒竜江^{こくりゅうかう}などは紫色^{むらさき}の内^{うち}にあれど北京^{ぺいじん}とも天津^{てんじん}とも書きたる処^{ところ}なきは余^{あま}りに心細^{こころこま}き思^{おも}ひせらる。二十世紀^{じゅうにせいき}末^まの地球儀^{ちきうぎ}はこの赤^{あか}き色^{いろ}と紫色^{むらさき}との如何^{いか}に变^かりてあらんか、そは二十世紀^{じゅうにせいき}初^{はじめ}の地球儀^{ちきうぎ}の知^しる所^{ところ}に非^{あら}ず。とにかくに状袋箱^{じょうぶくろ}の上に並^{なら}べられたる寒暖計^{わんぬんけい}と橙^{だいだい}と地球儀^{ちきうぎ}と、これ我が病室^{びやうしつ}の蓬萊^{ほうらい}なり。

枕^{まくら}べの寒^ささ計^{けい}りに新年^{しんねん}の年^{とし}ほぎ繩^{なは}を掛^かけてほぐかも

(明治三十四年一月十六日)

P7

2. 今は東京^{とうきょう}の小学校^{しょうがっこう}で子供^{こども}を教^{おし}へて居^ゐる人^{ひと}の話^{わたり}に、東京^{とうきょう}の子供^{こども}は田舎^{いんか}の子供^{こども}に比^ひべると見聞^{けんぶん}の広^{ひろ}い事は非常^{ひじょう}な者^{もの}であるが何事^{なにこと}をさせても田舎^{いんか}の子^こよりは鈍^{どん}で不器用^{ふきよう}である、たとへば半紙^{はんし}で帳面^{ちやうめん}を綴^とぢさせて見るに高等科^{こうとうか}の生徒^{せいと}でありながら殆^{たいてい}ど満足^{まんじつ}に綴^とぢ得^える者^{もの}はない。これには種々^{しゆしゆ}な原因^{げんいん}もあらうが総^{そう}ての事^{こと}が発達^{はつたつ}して居^ゐる東京^{とうきょう}の事^{こと}であるから百事^{ひじふ}それぞれの機関^{きかん}が備^びつて居^ゐて、田舎^{いんか}のやうに一人^{ひとり}で何も彼^{かれ}もやるといふやうな仕組^{しぐみ}でないのもその一^{ひと}原因^{げんいん}であらう、これは子供^{こども}の事^{こと}ではないが余^{あま}は東京^{とうきょう}に来て東京^{とうきょう}の女^{おんな}が魚^{いさな}の料理^{りょうり}を為^なし得^えざるを見て驚^{おどろ}いた、けれども東京^{とうきょう}では魚屋^{いさなや}が魚^{いさな}の料理^{りょうり}をする事^{こと}になつて居^ゐるからそれで済^すんで行く、済^すんで行くから料理法^{りょうりほう}は知らぬのである、云々^{うんうん}との話^{わたり}であつた。道理^{だうり}のある話^{わたり}でよほど面白^{おもしろ}い。自分^{じぶん}も田舎^{いんか}に住^すんだ年^{とし}よりは東京^{とうきょう}に住^すんだ年^{とし}の方が多^{おほ}くなつたので大分^{おほぶん}東京^{とうきょう}じみて来て田舎^{いんか}の事^{こと}を忘^{わす}れたが、なるほど考^{かんが}へて見^みると田舎^{いんか}には何^{なに}でも一家^{いっか}の内^{うち}でやるから雅趣^{みやうしゆ}のあることが多い。洗濯^{せんたく}は勿論^{もちろん}、著物^{しやくもの}も縫^ぬふ、機^{はた}も織^おる、糸^{いと}も引^ひく、明日^{あした}は氏神^{うぢがみ}のお祭^{まつり}ぢやといふので女^{おんな}が出^で刃庖丁^{やまばな}を荒砥^{あらか}にかけて聊^{いささ}か買^かふてある鯛^{たい}の鱗^{うろこ}を引^ひいたり腹綿^{はらわた}をつかみ出^でしたりする様^{よう}は思^{おも}ひ出^でして見るほど面白^{おもしろ}い。しかし田舎^{いんか}も段々^{だんだん}東京^{とうきょう}化するから仕方^{しかた}がない。

(五月二十八日)

3. その先生^{せんせい}のまたいふには、田舎^{いんか}の子供^{こども}は男女^{なんにょ}に限^{かぎ}らず唱歌^{ていが}とか体操^{たいそう}とかいふ課^かをいやがるくせがあるに東京^{とうきょう}の子供^{こども}は唱歌^{ていが}体操^{たいそう}などを好^{この}む傾^{かた}きがある、といふ事^{こと}であつた。これらも実^{じつ}に善^とく都鄙^{とひ}の

特色をあらはして居る。東京の子は活潑でおてんばで陽気な事を好み田舎の子は陰気でおとなしくてはでな事をはづかしがるといふ反対の性質が既に萌芽ほうがを発して居る。かういふ風であるから大人に成つて後東京の者は愛嬌あいきょうがあつてつき合ひやすくて何事にもさかしく気がきいて居るのに反して田舎の者は甚だどんくさいけれどしかし国家の大事とか一世の大事業といふ事になるとかへつて田舎の者に先鞭せんべんをつけられ東京ツ子はむなしくその後塵こうじんを望む事が多い。一得一失。

(五月二十九日)

4. 東京に生れた女で四十にも成つて浅草の観音様を知らんといふのがある。嵐雪らんせつの句に

五十にて四谷を見たり花の春

といふのがあるから嵐雪も五十で初めて四谷を見たのかも知れない。これも四十位になる東京の女に余がたけのこ筍の話をしたらその女は驚いて、筍が竹になるのですかと不思議さうにいふて居た。この女は筍も竹も知つて居ただけけれど二つの者が同じものであるといふ事を知らなかつたのである。しかしこの女らは無智文盲だから特にかうであると思ふ人も多いであらうが決してさういふわけではない。余がそうせき漱石と共に高等中学に居た頃漱石の内をおとづれた。漱石の内は牛込うしごめの喜久井町きくいちようで田圃たんぼから一丁か二丁しかへだたつてゐない処である。漱石は子供の時からそこに成長したのだ。余は漱石と二人田圃を散歩して早稲田から関口の方へ往たが大方六月頃の事であつたらう、そこらの水田に植ゑられたばかりの苗がそよいで居るのは誠に善い心持であつた。この時余が驚いた事は、漱石は、我々が平生喰ふ所の米はこの苗の実である事を知らなかつたといふ事である。都人士とじんしの菽しゆくばく麦を弁みやくぜざる事は往々この類である。もし都みやこの人が一匹の人間にならうといふのはどうしても一度は鄙住居ひなずまいをせねばならぬ。

(五月三十日)

P131 ~ P133

[コメント]

正岡子規晩年の四大随筆で、松蘿玉液に続いて書かれたもの。地方の子と都会の子の話などは面白いことこの上なし。痛みで苦しみながらこれほど自由な発想があるものかと感激する文章ばかり。

- 2010年1月3日 林明夫記 -